

おおきな木

杉山 湖道

一

おきよが亡くなったとき、一人娘の小夜はまだ五つだった。

おきよは小夜の弟を産んだあと、どうしても起きあがれなかった。

「逆子さかごを産んで、よっぽどからだにこたえたんや」

無精ヒゲを生やした佐十は下を向いて唇を噛んだ。

生まれたのは男の子で、生まれてすぐに源太と名づけられた。源太は元気に泣くこともなく、目を開けることもなく、しだいにちちを吸う力もなくなつて、生まれて七日目に、おきよの胸の上で息をしなくなった。

源太のなきがらは小さな桶に入れられ、ひっそりとした吊とむらいのあと、ひょうたん山の斜面にあるさびしい墓地に埋められた。墓地を見下ろすエノキの高いこずえに、カラスが群れて騒がしく鳴いていたのを小夜はまだ憶えている。

おきよは逆子を産んだのがこたえて、体力を使い果たしていたにもかかわらず、源太をひょうたん山に送らねばならない悲しみに耐えねばならなかった。泣いて涙を枯らして、いつの間にか正気を失つたおきよは、その二日後に、虚ろな目を開けたまま息をひきとつた。

弟と母親の死を目の前で見ても、死ぬということの意味を、小夜はまだよくわかっていなかった。目の前で、きれいなお母かはんが目を閉じて、あんなにあたたかかった顔や、手や、おちちがだんだん冷たくなってゆく。

「お小夜や」と呼んでくれんようになる。お母はん、もう一度うちを呼んで。なんで、な

んで呼んでくれんの。お母はん、小夜を呼んで。

佐十は若い妻の顔を撫でてまぶたを閉じてやった。

「小夜、お母はんは死んでもうたんや」

死んでもうたって、どういふことなん。

お母はんはどうなるん。うち、わからん。

おきよのために、貧しい佐十は盛大な葬式をしてやるのができなかつた。近所の爺さんが作つた提灯を先頭に、村人が黙って歩き、源太を葬つたばかりのひょうたん山に着いた。すつかり秋も深まり、青空に薄絹のような雲がかかっている。ひょうたん山は燃えるように紅葉している。

源太が埋められた隣に、おきよを埋葬することになった。

おきよを入れた桶が埋められるときになつてはじめて、もうお母はんには会えんのや、と小夜は気づいた。お母はんがお墓の土の下に埋められたら、もう金輪際、お母はんとお

話をする 것도、お母はんのやさしい顔を見ることができん。

「会えんのや！　もう、うちはお母はんに会えんのや！」

思いもよらないことになつたことによく気づいた小夜は、土をかけられている桶の上に飛び降りて、お母はん、お母はん、と呼びつづけ、激しく泣いた。

佐十が暴れる小夜の中からだを抱き上げた。さらに赤土が投げ込まれて平らになつた墓地に、佐十は竹筒を刺して、桔梗と藤袴と菊を供えた。エノキの高いこずえに、その日もカラスが群れて鳴いた。

「ところで佐十はん、おきよはんは、いくつやったかの」

覚念寺の住職が尋ねた。

「まだ、二十七でござりました」

「それはまた、まだまだ若いのに、お気の毒なこっちゃつた」

そばにうずくまっている小夜に目を落とし

て、住職は言った。

「男手ひとつでこんなこんまい娘さんを育てるのは、とりわけたいへんなことやさけの、また何でも相談しとくれなえ」

何でも相談しとくれなえ、というのはお父はんの再婚のことだということに、たった五つの小夜が気づくはずもなかった。

墓場から家に帰ると、粗末で小さな家の中が広く見えた。ぼっかりと広い空間を風が通って抜けていくような、頼りなげな家の中の、煤けたかまどが小夜の目にとまった。お母はんはあれを「へつついさん」と呼んでなきました、と小夜は思い出した。

へつついさんの前に敷いてあるゴザの上に座ると、小夜はお母はんの膝の上に座っているような気分になった。お母はんは、ここでご飯を炊いて、おみそ汁も作ってまきった。火がつきにくい時は、火吹き竹を口に当てて、煙そうに目をしかめて、ぷーっと息を吹きかけたりして……。

その時、小夜は柴や割り木を置いてある台のすぐ横に、小さな木の箱が置いてあるのに気づいた。お母はんの箱や、と思って手に取った。

「お父はん。こんな物があつたんやけど、これ、お母はんのやんね」

「そや。何が入っとるけ」

「お母はんは、何を入れとんまざるやろ。開けてもええやんね」

小夜がゆっくりフタを取ると、紙に包まれた茶褐色の木の実が三つ出てきた。ただそれだけだった。小夜は少々がっかりした。それはお母はんを思い出させるほどの物ではなかったからだ。

それでも、お母はんがいない生活が始まるのだということをお母はんが思ったのは、いよいよ寝ようかというときだった。お母はんはいつも、「寝小便をせんように、寝る前には廁へ行きまっし」と言っただけで家の前にある廁へ小夜を連れてきてくれた。お父はんはそんなこ

とに気づかない。

「お父はん、おしっこに行きたいがやけど」

娘にそう言われて、佐十はやっとそのことに気づき、おきよが黙って気配りをしていたことは、この何百倍もあるに違いないと思い始めた。家の中では、男は何もしていないに等しい。ましてや、若い娘に対する気配りなど、男親に何ほどのことができようか。この子を嫁に出すまでの道のりは、どんなに遠いことか。その遠い道のりのほんの一部も、佐十にはまだ見えていない。

小夜は、お母はんのいなくなった家の中で過ごすことの悲しさに必死で耐えながら、お母はんと過ごした日々をできるだけたくさん思い出そうとしていた。やさしい眼差しで小夜の方を見てにっこり笑うお母はんの頬にはえくぼがあった。美しいお母はんが、小夜の自慢だった。よく通る明るい声で「お小夜や」と呼んでもらうのが好きだった。畑で大根を抜いて家の前の大川で洗っていたお

母はん、山で薪を集めたあとでいっしょにお弁当を食べたときのお母はん……そうそう、あの時、野兎が跳びだしてきて、お母はんはおにぎりを落としてしまった。おかしかった。貧しくても、お母はんは暮らした日々は、いつもうきうきした気分やった。

「小夜、今晚はもう寝よまいけ」

佐十は小夜の布団を敷いてやった。

「お父はん、うち、お母はんの布団で寝たいがや」

娘の目が潤っていることに気づいた佐十は、しばらくためらったあと、きっぱりと言った。「お母はんが息をひきとった布団は、もう使うことはでけんさけ、小夜は小夜の布団で寝るんや。その代わり、お母はんの寝巻を掛けたるさけ、目えつぶって、早よ寝るがやぞ」

「はい」

「小夜は聞き分けのええ、賢いにゃあにゃあんね。来年から学校がっこうに上がったても、お母はんに似てようでける子になるがや」

「お母はんは勉強がようでけたん？」

「お母はんは学校で一番やった。お父はんは尋常小学校で終わりやったけど、お母はんは高等科まで進んで優秀な成績で卒業しなされたんや。同じ小学校の同級生のおなごで高等科まで進んだのはお母はんだけやった。わしは、小夜を金沢の大学まで行かしたいと思うとるがに」

「お金がいるんやんね」

「今は貧乏しとるが、小夜、お前が嫁に行くまでは、お父はんはどんなことをしてでも、お前にみじめな思いはさせんさけの。お母はんはのうても、お前は賢いええ子に育ってくれ。お前がしっかりしていたら、お母はんもきっと安心して喜ぶがいね……」

布団を並べて横になった佐十は、小夜にその語りかけながら、久しぶりに飲んだ酒がまわって、いつしか寝息を立てていた。先に寝入った振りをしていた小夜は、父が寝てしまったのを知るとこっそり布団から抜け出し、

障子から漏れる月明かりを頼りにへつついきんの前に来て、その場に崩れるように顔を伏せ、声を殺して、ゴザが濡れてしまうほど泣きじやくった。

やがて、小夜の耳はある小さな音を捉えた。
「コツン、……コツン」

音の間隔は、短かったり、ずいぶん長かったりで、何か軽い物が板に当たっているように聞こえた。あるいは、延びた木の枝が風に吹かれて、ときおり板戸を軽く叩いているようにも思えた。お母はんが入り口の戸を叩いているならすぐにでも開きたいのだが、そんな音ではなかった。

それが、家の前の井戸を覆う板屋根に、椎の実が落ちてきて当たる音だと気づいたのは夜が明けてからのことだった。椎の実はその後数日落ち続けたが、昼間にはその音がほとんど聞こえなかった。だが、夜が更けて辺りが静まりかえると、「コツン……コツン」という音が微かに聞こえてくる。

やっぱりあの音は、お母はんがうちを呼んでくれてまさるんや。うちが泣いてると思うて、慰めに來てくれてまさるんや。

二

味噌汁のにおいがして、「お母はんが作って待っていてくれまさるんや」と思って目を覚ました小夜は、母がもうこの家にはいないのだと気づいて深いため息をつく。早朝の漁から帰ってきた父が慣れない手つきで朝食の準備をしているのである。

そんなことが何度かあって、母を喪^{うしな}った悲しみがじわじわと小夜の身に染みていった。

お母^かはんはどこにいまさるんやろ、と小夜は何度も思う。

季節が巡って鳥の渡りの季節になると、無数の鳥たちが空を暗くするほどに飛び交って北へ飛んでいく。

「輪島の海のずっと向こうにある舢倉島^{へくらじま}へ飛

んで行って、そこで羽を休めるんや。長い旅やさけの」

鳥の群の行方を目で追いながらお父^とはんが言う。お母はんもあの世への長い旅をしてまさるんやろか。腹が減ったり、喉が渇いたりせんが。お母はんの旅の途中には、舢倉島みたいに休める所はあるがやろか。

秋が終わって冬になると、能登に吹きつける風が強くなった。海女漁の季節は終わり、浜の小屋には風よけの板が打ち付けられる。断崖絶壁に夜となく昼となく叩きつける日本海の荒波は、遠くから響いてくる能登の太鼓のようにも聞こえる。小夜はその重い音を聞きながら佐十の隣で眠る。弟と母が亡くなってからの一年間はひどくゆっくりと時間が流れていったように思える。

母の一周忌が終わった日、覚念寺の住職が佐十を寺の庫裏に呼んで言った。

「やっぱり、何かと不便でないかの。お嬢ちゃんも世話がかかるしの。それに、おまはん

もまだ三十超えたところや。独り身では辛い
や。たしかにおきよはんはええ嫁はんやった。
別嬪で賢い、ようでけた働きもんやった。言
うて悪いが、おまはんにはもつたいない嫁は
んやった。けど、あんなに若いうちに死なれ
ると、残されたもんが……」

おきよは縁あつて昭和二十一年に能登の七
尾に嫁いできたが、金沢近郊の比較的裕福な
農家に生まれて、海の仕事を知らなかった。
貧しい佐十との結婚に両親は最初のうち反対
したが、佐十の優しい誠実な人柄を信じるき
よの決心を揺るがすことはなかった。

七尾の佐十と夫婦めおとになつてはじめて、近所
のおばさんたちに海女の仕事を教えてもらう
ことになった。「能登のトトラく、加賀の力
からく」という言葉があるように、能登の女
たちは多くの時間を海の中で稼ぎ、飲んで遊
んでいる夫に代わつて家計を立派に支えてい
る。佐十はおきよの稼ぎをあてにして飲んだ
くれているような男ではなく、早朝に漁に出

て、昼間は日雇いの仕事に精を出す働き者で
ある。貧しさから抜け出して、生まれてくる
こどもたちを金沢の大学に進ませ、学校の
先生にさせるのがおきよと佐十の夢だった。

夢半ばにしておきよを喪うしなつたことは、佐十
にとつて予想外のことだった。おきよが亡く
なつたからといって、その代わりに誰かと、
という気にはなれない。おきよに対して申し
訳ないというより、これまでおきよとの間に
築いてきた信頼の絆を一方的に断ち切るよう
なことを、人間としてしてはならない、と佐
十は思った。もちろん、小夜が悲しむだろう
という思いもあった。

「ちよっこし待ってほしいがや。わしに後添
えを勧めてくれまさるがけ。ごえんさんのお
気持ちは有り難いこつてすけん、わしはそ
の気になれんさけ、どうか放つておいてくれ
まさらんけ。おきよを裏切るようなまねは、
わしにはどうしても……」

「佐十はん。おまはんの気持ちはわしにもよ

う分かる。おきよはんは今もちつとも変わら
ず愛しゆう思うてる気持ち、愛別離苦の情、
わしはよう分かつたうえで敢えて言うてるが
や。よう考えてみまっし。今がええ時や。あ
と何年かすりや、お嬢ちゃんが難しゆうなる。
おなごの子の難しさは、男親には手に負えん。
ど坊主はいつまでもガキのままやけんど、お
なごの子はあつという間に心もからだもおと
なになりよる。そうなつたら、たとえ後添い
が来て、おいそれとは懐いていかんがいね。
母親が欲しい今なら、すうつと懐いて、ほん
まの母と娘みたいになれるんやさけの。なあ、
佐十はん、おまはんにとつても、お小夜ちゃ
んにとつても、今がええ頃合いやんね。あの
子のことを考えたたら、これは裏切るのなんの
という話ではないがや」

檀家の若者の苦境に手を差し伸べようとい
う一念で佐十に語りかける覚念寺の住職の言
葉には、その場でお断りしますとは言いにく
い力があつた。

佐十が帰宅すると、小夜は庭先に出ていて、
井戸の周りに落ちた椎の実を集めていた。

「小夜、ようけ集めたんね」

「けど、お母はんが箱に入れておきまきつた
ドングリとは形が違うよ」

「お母はんのドングリはどうしたんね。あれ
は椎の実やつたが」

「今年の春に植えておいたよ、畑んここに」

「芽が出たかあ」

「うん、ちよっこし。三つともね」

小夜は佐十の手を引いて椎の実を植えた場
所に案内した。小夜が春先に畑の隅に植えて
おいた三つの種からは、早くも五月には土の
中から小さな芽が出て、梅雨の終わり頃には
もう枝らしいものがわずかに伸び始めた。

「うっかり鋏で掘り起こしてしまわんように、
囲いを作っておくがや」

佐十は三本の幼木の周りの地面に竹の棒を
刺して縄を張り、周りの雑草をていねいにむ
しつた。

あれは、三つか四つぐらいのころだったかしら、と小夜は思い出した。覚念寺の裏の墓地にお墓参りをしたとき、六地藏さんの屋根に椎の実が落ちてきて、それを拾った母が歌を教えてくれた。

しずかな しずかな 里の秋

お背戸に 木の実の 落ちる夜は

ああ母さんと ただふたり

栗の実煮てます 囲炉裏端

墓地にはほかに人がいなかっただろう、お母はんはよく通る澄んだ声で歌った。小夜はすぐにそれを覚えて、三回目には母と声を合わせて歌った。

その歌を思い出して、父の前で口ずさんでみた。おかつば頭で大きな声で歌う小夜を、父は笑顔で見つめていた。

「小夜はお母はんに似て歌がうまいやんねえ。二番も覚えとるがけえ」

父の誉められて気を良くした小夜は、記憶をたどりながら歌を続けた。

明るい明るい 里の空

鳴き鳴き夜鴨よがもの 渡る夜は

ああ父さんの あの笑顔

栗の実食べては 思い出す

あとで調べて分かったことだが、この歌は復員兵や引き揚げ者を励ますために昭和二十年の暮に発表された国民歌謡だった。笑顔を思い出してもらっている父さんは、はたして無事に日本に帰ってくるのができたのだろうか、と考えるようになったのは大人になってからのことだ。明るい月の夜空を渡ってゆく鴨の群は祖国へ帰る日本人たちの姿かも知れない。その後、不幸にしてシベリヤに抑留されるといふ不条理な運命もてあそに弄ばれた多くの人たちがもしこの歌を聞いていたら、異国の空を飛ぶ渡り鳥の姿に、片時も忘れたことの

ない帰国グレイの夢を重ねたに違いない。

「小夜は上手やがいね。このぶんなら、小学校に上がっても音楽は上々の成績間違いないしや。この歌は三番もあるげんよ。わしが歌うたろ」

佐十は海の男らしい塩がれた声で歌った。

さよならさよなら 椰子の島

お舟にゆられて 帰られる

ああ父さんよ ご無事でと

今夜も母さんと 祈ります

そうやった、お母はんが歌うてくれた三番はそんなんやった、と小夜はうれしくなった。

住職の浄信や親戚の勧めにもかかわらず、佐十は再婚を拒んで、ひとり娘小夜のためだけに生きた。おきよと約束したとおり、小夜を金沢の大学にやって先生にするという夢を実現することだけが彼の望みだった。

小夜はその次の春に小学校に入学した。小

夜が母の無い子だからと言われないうちに、佐十は娘が着る物にはとくに気を配った。制服の下に着る白いシャツは三着買って、頻繁にクリーニングに出した。白い靴下の洗濯には特に気を使って真っ白に洗った。小夜に汚れた衣服を着せておくというような惨めなことは絶対にしたくなかった。学用品は、鉛筆も筆箱も、金沢のデパートで買ってきた最高の物を使わせた。

弁当は本を読んで手間をかけて作った。男の無骨な手で作ったとは思えない、彩りの良い可愛い弁当を持たせてやったから、小夜の周りのこどもたちはそれを羨ましがった。もっとも、二年生からは学校給食が始まり、佐十の弁当作りにかける情熱は、夕食作りに向けられるようになった。

家庭訪問の日は、いつもより丁寧にひげを剃って「先生さま」を迎えた。彼にとって、先生という存在は畏れ多いものであり、だからこそなんと少しでも自分の娘を先生にした

かったのだ。

訪問してきた年輩の女性の担任は、緊張している佐十にこう言った。

「小夜ちゃんに聞しては何の心配もありません。勉強も運動も、こんなに何もかもできる子を、長年教師をしている私も見たことがありますわ」

その晩、仏壇に向かった佐十は、先生の言葉をおきよにそのまま伝え、良かったなあと言って落涙した。

小夜が畑に植えた三本の椎の木のうち二本は山から下りてきた鹿に樹皮を食われて幼木のうちに枯れてしまった。残った一本の椎の幹の周りに、佐十は金網の柵を取り付けて保護した。木は順調に育ち、いつの間にか小夜の身長を超えて、枝も四方に大きく広がりはじめた。おきよの残した三粒のドングリの種は、こうして一粒だけが生き残り、能登に吹く強い潮風にも負けず、逞しい樹形を見せるようになった。

小夜が六年生になった年の夏、彼女の体に変化が起こった。小夜の家庭の事情を知っている保健の先生が、小夜が帰宅する前に電話で佐十に知らせてくれたのだった。それは、成長の過程での一段階と喜ぶべきことで、母親のいる家庭なら赤飯を炊くとか、何らかの形で祝うはずであった。しかし、一人で娘を育ててきた男親にとって、娘の成長はうれしい反面、どこかきみしいものであった。手塩にかけて育ててきた娘が、いずれは父親の下を離れてゆく。体の変化はその最初の一步なのだ。

母親が生きていれば、助言をしたりもできるのだが、男親ではそのことを口に出すのも恥ずかしい。佐十は能登島に嫁いでいる年の離れた妹の澄子に伝えて、次の日曜に来てやってくれと頼んだ。佐十とは対照的に陽気で口数の多い妹は二つ返事で任せておいて言った。

小夜はその夜、母の鏡台から母が愛用して

いた黄楊うわげの櫛を取り出して、肩まで伸びた髪を梳いた。その横顔には、いつの間にか若い娘らしいやわらかな曲線がそなわっていて、美貌であった母親の面影が見えた。佐十は何かしら落ち着かないまま仏壇の前に行つて、この大切なことをおきよにそつと告げた。

三

平成十三年の秋に、小夜は覚念寺の本堂を借りて父母の法事を勤めた。母きよの五十四忌法要と、父佐十の七回忌法要であった。広い本堂の隅々までよく通る声で読経したのは、佐十に再婚を勧めていた浄信の孫で、京都の大谷大学を卒業したばかりの専信だった。

法要のあと、七尾市の料亭の一室を借りて、法事に参加してもらった人たちへのお礼を兼ねて会食の場を用意した。

小夜はすでに五十代半ばである。父母の望み通り、金沢大学の教育学部を卒業して教職

の道に入り、今は母校の小学校の教頭を務めている。すでに独立した娘と息子も、それぞれの伴侶と幼いこどもを連れて法事にかけてくれた。

五十年の歲月の中で母方の係累がほぼ絶えてしまっていたために、能登島からやってきた父佐十の妹澄子は、その日のいわば主賓であった。澄子は七十六歳のはずだが、まだまだ青春後期の生き生きとした表情で、昔と同じように口だけは参会者の誰にも負けないほど達者であった。

「小夜ちゃん、あんやと。こんな婆さんでも誘うてくれまっしやるさけ、よせてもろうたがや。覚えとるがが、小夜ちゃんが六年生であれになったとき、佐十さんおろおろして私に電話してえ……」

「あの節には叔母ちゃん、あんやと。心配かいたんね。あれは女の始まりやさけ、ちよっこしうろたえたがやけど、ははは、もう終わってしもうたがや」

「えっ、小夜ちゃん、もうアレが終わってしまたん？ あんた、もうそんなトシなん？

道理で、叔母ちゃんもトシとるはずやんね」

そんな話を皮切りに、澄子叔母さんは次から次へと話題を変えて小夜を質問攻めにした。澄子にとって、小夜は今でも可愛い姪っ子なのだ。

白山の麓で蔵出しされた銘酒がふるまわれ、人一倍酒好きな澄子は飲み過ぎて足が立たなくなつた。息子がクルマで迎えに行くからと電話してきたが、「今夜は小夜ちゃんところへ泊まるさけ、来んでええがや。明日は日曜日やさけ、小夜ちゃんはどうせヒマやしい」と、勝手に泊まることに決めてクルマでの迎えを断つた。

小夜は澄子叔母さんと布団を並べて寝るころになつたが、酔いが醒めた澄子は持ち前の饒舌癖を發揮して夜遅くまで小夜を寝させなかつた。

「おきよさんが亡くなったとき、佐十さんは

まだ三十やつた。それから、再婚もせんど男手ひとつであんたを育てて一生を終えたがいね。もう七回忌かいね。嫁さんがおらんで寂しいと思うたこともあつたやんね。それでも独身を通したのは、おきよさんに惚れてたいうこともあるがやけんど、それよりも、小夜ちゃん、あんたに寂しい思いをさせんところとしてたんやろね」

澄子叔母さんの言う通りだろう。お父はんは、私だけになつぷりの愛情を注いでくれたのだ。お母はんの残した椎の実を畑に植えて育てていた私の気持ちがあつて、うしろから見守ってくれていたのだ。心の優しいええお父はんやつた。お母はんが惚れて一緒になつたのもよう分かる。五歳で別れた母の五十年前の記憶は次第に薄れつつあるが、父はまだ過去の人ではない。

澄子叔母さんに頼まれて昔のアルバムを出してきた。父がこども時代に澄子叔母さんとどこかの海水浴場で撮ってもらつた写真もあ

る。写真館で写したらしい父と母のセピア色の結婚記念写真もある。貧しくて新婚旅行には行けなかったそうだが。

澄子叔母さんはそれらを見ながらしゃべり疲れて、いつの間にか枕に顔を落としていた。

翌朝、叔母さんのたつての願いで、あの椎の木を見に行くことになった。畑があった場所は、今は小夜が教頭として勤務する小学校の校庭になっている。小学校の元の建物があった場所は、数年前の台風の時に起きた裏山の大规模な地滑りで流され、校舎の三分の一が倒壊してしまった。

新しい校舎は安全な平坦地に建てようということになり、選ばれた場所の一画に小夜の実家の屋敷と畑が含まれていた。すでに父佐十は亡くなっており、小夜が父母と暮らした懐かしい家は無人であったため、その場所を更地にして新しい校舎を建てることにとくに問題はなかった。その家で生まれ育った澄子叔母さんも、その場所を小学校の用地として

提供することに快く応じた。小夜はあの椎の木を伐採しないことを条件に土地を提供した。実家は跡形もなく壊されて更地になり、能登の木材をたっぷり使った新校舎が建設された。母が種を残し、小夜が植えて育ったあの椎の木は、能登の潮風に耐えて堂々とした大樹に成長し、大きな枝を四方に広げていた。夏は涼しい緑陰を提供して、こどもたちの恰好の遊び場になっている。

「おおきな木やんねえ」

澄子叔母さんが見上げて感嘆の声をあげた。つやつやとした照葉の裏側は金色に輝いている。黒褐色の樹皮には縦の裂け目が走り、夏にはさまざまな昆虫が樹液を求めて訪ねてくる。樹木に詳しい同僚によれば、この大樹はブナ科のスタジイだという。秋の風に揺られる枝からは、もうドングリが落ち始めていて、近所の幼い女の子と母親がそれを拾いに来ている。覚念寺の裏の墓地で母に「里の秋」を教えてもらったとき、私はあれぐらいのこど

もだったかしら。小夜はそう思っ
て、あの時の母の、えくぼの
かわいい顔と涼やかな声を
思い出そうとしている。

(完)